

研究機関名：旭川医科大学

承認番号	16221
課題名	下肢遠位バイパス時のグラフト血流量に影響を及ぼす因子の検討及び流量測定式の算出
研究期間	倫理委員会承認日 ～ 平成 30 年 3 月 31 日
利用する情報、検体	☒診療情報（詳細：年齢、性別、身長、体重、血圧、既往歴、診断名、検査結果、画像結果、術前及び術後超音波検査結果、等 ） ☐手術、検査等で採取した組織（対象臓器等名： ） ☐血液 ☒その他（手術情報（術式、使用グラフト種類・性状、グラフト流量、術中画像検査結果））
	※以下の期間に収集した情報が対象となります 西暦 2009 年 1 月 1 日 ～ 2017 年 3 月 1 日
研究の意義、目的	動脈硬化の進行により生じる、下肢閉塞性動脈硬化症は患者数が今尚増えており、社会的に問題となっている疾患です。動脈硬化により生じる血管狭窄・閉塞によって虚血が進行した場合、下肢の安静時疼痛、下肢の潰瘍形成・壊疽形成といった“重症虚血肢”と呼ばれる状態となり、下肢の切断が余儀無くされる場合も少なくありません。こうした重症虚血肢の治療において、下腿もしくは足関節周囲の動脈へのバイパス手術は症状の改善及び下肢救済において非常に重要な役割を担っています。バイパスグラフトの長期開存は、下肢切断の回避だけではなく生存率の改善においても重要であり、グラフト閉塞を回避すべく様々な研究がなされていますが、グラフト閉塞は未だに血管外科領域において解決できない問題です。 今までの研究で、バイパスグラフトの流量はグラフト開存の予後推定に有効であるという報告がなされており、手術時のグラフト流量の計測は広く行われています。また、グラフトの術後早期の閉塞は、血管吻合場所、吻合方法、グラフト自体の異常といった手術の手技、材料、方法の問題に原因があることが多いとされています。グラフト早期閉塞をきたす症例は、下肢切断のリスクが高いとされ、回避が望ましいのですが、5～20%程度の確率で生じうる事象と報告されています。そこで、術中のグラフト流量の測定がグラフトの早期閉塞をきたすような異常の同定に役立つ可能性があるかと期待されます。しかしながら、グラフト流量は患者背景により大きく異なり、異常検出のための絶対的な指標はありません。本研究では、グラフト流量に影響を与える因子を検討し、その因子を用いて、グラフト流量の推定式を導き出すことを目的としています。グラフトの理想値を算出し、指標とすることで早期閉塞をきたす異常を早期に検出できることが期待されます。

研究の方法	本研究では、過去に治療した症例のデータを収集し、検討を行う後ろ向き研究です。 術前の患者背景(年齢、性別、身長、体重、診断名、既往歴、画像結果 等)及び手術情報(手術術式、術中所見、術中画像結果、手術時間、出血量 等)及び、術後の定期観察項目である超音波検査での検査結果、術後の全身状態を記録し行う研究です。 2009年1月から2017年3月までに当施設にて、下肢閉塞性動脈硬化症に対して下腿もしくは足関節周囲へのバイパス手術を行なった症例を対象としてデータ収集を行います。
その他	
個人情報について	利用する情報、お名前や住所など、個人が特定できる情報は削除して取り扱いますので、個人情報が外部に漏えいすることはありません。研究成果発表（学会発表、学術論文への投稿）の際にも、個人が特定できる情報は利用しません。
問い合わせ等の窓口	所属： 旭川医科大学 血管・呼吸・腫瘍外科学分野 氏名：三宅 啓介 電話番号：0166-68-2494